

六羽の白鳥

グリム兄弟 Bruder Grimm

楠山正雄訳

青空文庫

ある国の王さまが、大きな森のなかで、狩かりをしたことがありました。王さまは、一ぴきけものをみつけて、むちゆうで追って行きました。お供とものけらい衆しゅうのうち、たれひとりあとなにつづくことができないくらいでした。するうち日ひがくれかけて来たので、王さまは追うことはやめて、立ちどまったまま見まわしてみても、森にまよいこんだことがわかりました。どこか出る路はないかとさがしましたが、みつかりませんでした。ふとみると、むこうからひとりのばあさんが、あたまをゆすぶりゆすぶりやって来ました。これはただのばあさんではなくて、魔法まほうつかいの女でした。

「おばあさん、この森を出る道をおしえてくださらんか。」と、王さまはいいました。

「はいはい、王さま。」と、ばあさんは、こたえました。「それはおやすいご用でございですが、ただそのかわり、ひとつおやくそく願うことがございます。それをそのとおりにしていただきますと、王さまはこの森をけっしてお出になることができませぬし、それなりかつえ死になさらなくてはなりません。」

「それはどんなやくそくだろう。」と、王さまはたずねました。

「わたくしに、ひとり、むすめがございます。」と、ばあさんはいいました。「うつくしいむすめでございまして、それはまず、王さまがこの世界で、ふたりとお手に入れることはできまいとおもわれるほどで、まったく王さまのお妃きさいぎとして不足はございません。いかがでしょう、むすめをお妃きさいぎになさいますか、そうすれば森を出る路みちをおしえてさしあげましょう。」

王さまはどうなることか心配しんぱいで胸がいつぱいでしたから、ばあさんのいうとおりしようちしたので、ばあさんは王さまを自分のこやへつれこみました。こやの中には、むすめが火にあたっていました。むすめはさも王さまのくるのがわかってでもいたように、いそいそ立ってむかえました。王さまがみると、なるほどずいぶんうつくしいむすめでしたが、どうも気に入りませんでした。顔を見ているうちに、なんとなくぞうつと引きこまれるようなかんじがしてなりませんでした。それでもむすめをいっしよの馬にのせると、ばあさんははじめて王さまに路を教えました。それで、王さまはやつとお城にかえたので、さつそく、ご婚こんれい礼の式があげられました。

さて、この王さまは、まえにいちど結婚けっこんなさったことがあって、そのお妃きさいぎに、男の子

が六人、女の子がひとり、つごう七人のお子がありました。そして王さまは、世界じゅうのどんなものよりも、このお子たちをだいじにしていました。で、こうなると、こんどのままおかあさまが、こどもたちにやさしくしないで、とんでもないひどいことでもされてはときづかかって、森のおくにぼつんと立っている御殿ごてんのなかに、お子たちをつれて行きました。

この御殿は、ひとがみてもわからないようになっていて、おまけに、そこまで行く路みちをみつけるのがとてもむずかしく、王さまご自分の力では、どうにもなりません。それを教おそわるのは、通つうりき力をもったある女のひとが、ふしぎなきどくをもつおだまきの糸をくれたおかげでした。このおだまきは前になげると、ひとりでにむこうへほぐれて行って、路を教おそえてくれました。ところで王さまが、たびたびかわいいお子たちの所へあいに出かけるうち、つい王さまのおるすを、お妃がかぎつけることになりました。お妃はだんだん気になつてきて、いったい、森の中へ王さまはたったひとりでなにをしに出かけるのか、知りたくてならなくなりました。そこでお妃は、王さまのけらいの者にたくさんお金をやると、こやつらはさつそく、王さまのないしょごとをあかして、おまけにふしぎなおだまきだけが道しるべをしてくれることまで、べらべらしゃべりました。さあ、こうなると、どこに

そのおだまきがしまつてあるか、それをさがしだすまで、お妃の胸は休まりませんでした。おだまきが手にはいると、さつそく、この女は、白い絹でちいさな肌着をつくりました。それから、かねがね、母親から魔法の術をならつておいたので、この肌着をぬいながら魔法をしかけておきました。さて、ある日、王さまが、れいの狩に出かけてるすなのをさいわい、お妃はこの肌着をもつて森に出かけました。おだまきが道しるべしてくれました。こどもたちは、とおくからたれかくるのを見て、おとうさまがいらしたとおもつて、大よろこびでとんで出てきました。すると、女はそのひとりひとりに、さあつと魔法の肌着をなげかけました。そして、それがこどもたちのからだにさわると、みんな白鳥にばけて、ばたばた森のむこうへとんで行つてしまいました。

お妃は、うまく行つた、と大にこにこでかえつて行きました。そして、これできれいにままつ子どものかたがついたと安心していました。でも、女の子だけひとり、そのとき、おにいらさんたちについてとびだして行かなかつたので、この子のあることをお妃はすこしも知らずにいました。

それから日をおいて、王さまが、お子たちにあいに来ました。ところが、女の子だけで、あとの子はたれもみつかりませんでした。

「にいさまたちはどこへ。」と、王さまはたずねました。

「ああ、まあおとうさま。」と、女の子はいいました。「おにいさまたち、みんなどこかへ行つちまつてよ、ひいちやまひとり、おいてきぼりにして。」

それで、女の子が、お窓の所からみていたら、おにいさまたちが白鳥になって森のむこうへとんで行つてしまった話をしました。それから、その白鳥の羽根がお庭におちいてたのをひろつておいたのを出してみせました。王さまは悲しいおもいをしました。でも、それをまさかお妃のわるいしわざとは、おもいもありませんでした。で、この上女の子までさらつて行かれてはたいへんだとおもつて、いっしょにお城へつれて行こうとおもいました。けれど、このひいさまは、なんだかままおかあさまがこわいので、王さまに、どうぞ、せめて今夜もうひと晩、このまま森の御殿ごてんにいさせてくださいといつてたのみました。

ひいさまは、いじらしくも、こうおもっていました。

「おにいさまたち、もうここにはいらつしやらないのだ。よし、あたし行つて、おにいさ

またちをさがして来ようや。」

それで、くらくなるのをまちかねて、そつとひいさまはうちをぬけだすと、すぐと森の中へはいって行きました。それから、ひと晩ばんじゆうあるきまわって、あくる日もまたあるきどおしにあるいたので、さすがにくたびれて、もうひと足も行けなくなりました。ふと一けん、森のこやをみつけてはいつて行くと、へやのなかにベッドが六つならべてありました。けれどひいさまは、その上にいきなりからだをのせることはえんりよして、ひとつのベッドの下にはいこんで、ゆかのかたい板の間にごろりとなつて、今夜こんやはあかすつもりでした。

ところが、お日さまがやがてしずもうというじぶん、ばさばさいうこえがして、六羽の白鳥が、窓の所へとびこんでくるのがわかりました。白鳥たちは、ゆかの上にならびました。そして、おたがい、ふうふう息をふきかけますと、のこらずの羽根がふかれて落ちました。そうして、かぶっている白鳥の皮かわが、肌はだ着をぬぐようにぬげました。ひいさまがみると、それがおにいさまたちだとわかりましたから、大よろこびで、ベッドの下からはいりました。おにいさまたちも、ちいさい妹いもうとをみつけたので、まけずに大よろこびしました。でも、みんなのこのよろこびは、つかの間のまものでした。

「おまえ、ここにこうしてはられないよ。」と、おにいさまたちはちいさい妹にいいました。「このうちは山賊さんぞくのかくれがだよ。だから、やつらがかえって来て、おまえをみつけたら、きつとおまえ、ころされるよ。」

「だって、おにいさまたち、あたしの身方みかたをしてくださるでしょう。」と、ちいさい妹はいいました。

「ううん、だめなのさ。」と、にいさまたちはこたえました。「だって、ぼくたち、まいばん、たった十五分だけ、白鳥の皮をぬいでいられることになっていて、そのあいだにんげんの姿にかえるんだけれど、それがすぎると、また白鳥にされてしまうんだもの。」

そうきいて、ちいさい妹は泣きながら、

「おにいさまたち、いつたい、どうかしてもとにかえることはできないの。」とたずねました。

「ああ、それがね、」と、おにいさまたちがいいました。「できるにはできても、それまでするのが、とてもむずかしいのだよ。それには、おまえ、六年のあいだ、口をきいても、わらってもならないし、そのかわりに、そのあいだじゅう、せつせとえぞぎくの花をあつめて、ぼくたちのきる肌着はだぎをぬってくれなければならぬのだよ。それがすむまで、ただ

のひとつ言ことでも、おまえの口からもれたら、せつかくのしごとがそっくりふいになってしまことうのさ。」

こう、おにいさまが話しているうち、いつかもう十五分の時が立ちました。六人が六人また白鳥になって、窓からばたばた、とび立ってしまいました。

ひいさまは、でも、あくまでおにいさまたちを、魔法まほうからたすけだす決心をかためました。そのためには、いのちをすててかかるかくごでいました。それで、森のこやを出ると、森の奥ふかくはいつて行って、一本の木の上にのぼって、そこでその晩はあかしました。あくる朝はもうさつそく出かけて、えぞぎくの花をあつめて、肌着をぬいにかかりました。たれとも話はできませんでしたし、てんでわらうなんという気がおこりませんでした。ただあけくれ木の上ですわって、しごとにはかりかかっていました。

三

こんなふうで、かなりながいことすぎましたが、そのうち、この国の王さまが、森で狩かりをするということがはじまって、りようしたちが、ひいさまののっている木のちかくにや

つて来ました。

りようしどもは、下から声をかけて、

「おい、おまえ、だれだい。」といました。

ひいさまは、なんともこたえません。

「おれたちの所へおりておいで。」と、このなかまはいいました。「おれたち、どうもしやしないからな。」

ひいさまは、ただあたまをふるだけでした。

それでも、なかまがまだしつこく、ああかこうかときくので、ひいさまはこまって、かけている金のくびわをはずして投げてやりました。これでしようちして行ってもらおうと、ひいさまはおもいました。ところがそれでははなしてくれません。そこで、しめている帯おびをなげてやりました。これでもまだだめなので、靴くつした下どめをなげてやりました。それからまだあとからあとからと、身につけたもので、まあなくてすむもののこらずなげてやりましたから、とうとう肌着だけになりました。これだけにしても、りようしどもはいっかな引きさがろうとはしず、あべこべに、木の上までのぼって来て、ひいさまをかかえだして、王さまのところまでつれて行きました。

王さまは、

「おまえ、だれなの。木の上でなにをしていたのだね。」と、たずねました。でも、ひいさまは、だまっていました。

王さまは、知っているだけの国ぐにのことはをつかたずねてみました。けれど、ひいさまは、おさかなのようにむんとだまったままでした。それでも、ひいさまがとてもきれいなので、王さまは心がうっとりとして来て、もうこのひとが、大すきになりました。それで、自分のきているマントをぬいで、ひいさまにきせてやり、自分のまえにひいさまをのせて、馬でお城にかえりました。かえるとさつそく、きれいなきものをそろえて着せましたから、もともと美しいひいさまが、まひるの日のようにあかるくてりがやいてみえました。ただその口から、ただひと言ものをいってはもらえませんでした。食事のときも、王さまは、ひいさまをそばにすわらせました。すると、ひいさまのしとやかなようすものごといい、品格ひんかくといい、なにならなまで、王さまのお気に入りしました。そこでとうとう、「わたしの結婚けっこんするあいてはこのひとのほかにないぞ。世界じゅうどこをさがしたつてないぞ。」と、いって、それからいく日かののち、ひいさまとご婚礼こんれいをすませました。

四

さて、この王さまには、あいにくと、いじわるいおかあさまがありました。このおかあさまは、こんどの結婚が気に入らないので、わかいお妃おききのことを、わるくばかりいい立てました。

「ぜんたい、どこのげす女だか知れたものではありませんよ。」と、この女はいいました。「そんな、口くちもきけない女なんてありますか。王ともあるものあれが相手でしょうか。」一年立つて、お妃ははじめてのお子を生みました。すると、それを、このばあさまがさらって行きました。そしてねむっているお妃の口に血をぬりたくっておきました。そうしてから、王さまのところへ出かけて、あの女は、人おにくい鬼おにの女だ、ととんでもないことを言いつけました。でも、王さまはそんなことをとり上げようとはしません。それよりかそんなことをいいふらして、お妃を苦くるしめることをなさけなくおもいました。お妃はというと、いつもにかかわらず、じつとすわって、肌はだ着ぎをぬいつづけていて、ほかになにごとがおころうと心にとまらないううでした。

そのつぎにまた、うつくしいお子を、お妃が生みますと、れいのいじくねわるいお姑しゆうとはおなじたくらみをしましたが、王さまは、まだその告つげ口をほんきにとり上げるまでの決心はつきませんでした。

そこで、王さまはいいました。

「あれはいかにも信心のあつい心のよいもので、とてもそんなだいそれたことのできる女ではありません。あれがあいにくおしでなく、自分じぶんで言いとくことができたら、罪つみのないあかしが、ひるの日のようになりましように。」

それでも、とうとう、三どめに、このばあさまが、生まれた子をさらって行って、お妃きぎきのせいにしてうったえたとき、それでもお妃はただひと言もいいわけをしようとしなくて、さすがの王さまも、いやでもお妃をさいばんにかけるほか、どうしようもなくなりました。裁判所さいばんしょは、お妃を火あぶりの刑けいにおこなう、と言いわたしました。

五

いよいよ言いわたしのとおり、おしおきが行われる日になりましたが、それがちようど

また、お妃きとぎには、ものもいえずわらってならないという、まる六年ものきげんのみちるさいごの日にもあたりました。この日かぎりには、お妃は、おにいさまたちをみごと、魔法まほうから助けだしたのです。六枚の肌着はだぎは、このときもうほとんどでき上がって、ただ六枚めの左の片袖かたそでだけがたりないだけになっていました。お妃は火あぶりのたきぎを積み上げた上につれだされたとき、六枚の肌着を、しっかりとそのうでにかけていました。お妃がたかい台だいの上に立つて、いよいよたきぎに火がつこうというとき、お妃は、そつと四方に目を注ぎました。とたんに、六羽の白鳥が、さあつと空からまいおりてきました。ああ、救いが目の前にやって来ましたわ、そうおもって、お妃は喜びに胸をとどろかせました。白鳥たちは、ばたばた羽音はねおとを立てながら、お妃の近くにとんで来ました。そして、肌着を投げかけることのできる所に、おり立ちました。

さて、肌着がからだにふれると、白鳥の皮はばらりとぬけおちて、おにいさまたちは、ちやんとした人間の姿になつて、そこに立ちました。そしてたれもわかかわかしく、うつくしくみえました。ただいちばん下のおにいさまだけ、左の片袖がまにあわなくて、白鳥のつばさをまだせなかくつつけていました。きようだいたちはだきあつて、せつぷんしました。お妃は、びつくりぎょうてんしている王さまの所へ行つて、お話の口を切りました。

「おいとしい殿さま、わたくしはものが申せることになりました。そこで、はつきりと申しあげます。わたくしにつみはございません、ながいこと、あられもないぬれぎぬを着せられておりました。」

こう言つて、お妃は、れいのばあさまのたくらみで、三人の子をかすめて、どこかにかくしてあるしだいを、くわしく話しました。ちようどそこへ、お子さまたちがつれてこられたので、王さまのよろこびはたいへんなものでした。それで、いじわるい姑は、かわりに火あぶりの柱はしらにいわえられて、やかれて灰になりました。

さて、王さまとお妃とは、六人のおにいさまたちともども、末ながくしあわせに、なかむつまじくくらししました。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年1月20日初版発行

1949（昭和24）年4月10日再版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：浅原庸子

校正：大久保ゆう

2012年5月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

六羽の白鳥

グリム兄弟 Bruder Grimm

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 楠山正雄訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>